高校生の英語を担当している先生・研修担当者・教育関係者対象

学力を伸ばすTOEFL Junior®のスコアレンジに基づく活動案

深化する英語授業 前半
～訳読の限界から新たなアプローチ～

松蔭中学校・高等学校　篠原 弘樹

【著者より】

私たち教員の授業で生徒たちは成長し、未来の可能性が広がっていく。学習指導要領の「思考・判断・表現」が表す通り、英語の授業でも思考力を育み、実践的なパフォーマンス力を高めることが求められています。新しい時代における授業を検討する際に、学習指導要領に従い、何か1つでもお役に立てれば幸いです。またNote(右下QR)でも、他の実践例や取り組みを紹介しているので、ご参考ください。今回のレポートは前半と後半の2部構成です。前半は訳読の限界から転換を行い、そこからどう考えていくかの部分、後半はTOEFL Junior®のスコアレンジも踏まえて、どう実践していくかの具体的な事例を紹介します。合わせて、ご確認いただければ幸いです。

【2部構成】

深化する英語授業（前半）～訳読の限界から新たなアプローチへ～
深化する英語授業（後半）～新アプローチの実践と具体事例～

【読み手】

- ☐ 英語教育に関心・情熱のある方
- ☐ 検定対策(特に英検のライティングやTOEFL Junior®)に苦慮する先生
- ☐ ちょっと新しい活動を取り入れてみたい先生
- ☐ もう1歩先の英語力を見据えて教えたい先生

【Note:篠原 弘樹】

1. 訳読中心の英語授業の限界 ～過去の授業を振り返って～ …… p.1
2. 検証データの提示 ～データから明らかになる生徒の成長～ …… p.2
3. 設問の指示文と考える力 ～TOEFL®と国語の指示文は同じ～ …… p.3
4. 授業計画の立て方 ～明日から実践できる効果的な授業計画プラン表～ …… p.5
5.最後に …… p.7

Danke Sehr

1. 訳読中心の英語授業の限界 ～過去の授業を振り返って～

約10年前に中学1年生から高校3年生までの6年間、持ちあがりで英語の授業を担当した。その当時は、GIGAスクール構想が始まる前で、オールイングリッシュの授業を取り入れようとする新たな時代だった。私自身も可能な限り授業内で英語を使用しつつ、新しい教育法へ移行しようと挑戦していたが、昔ながらの訳読中心のアプローチも多く取り入れていた。

そんな中、中学3年生になる頃には英検（実用英語技能検定）のライティング試験が導入され、4技能試験が大学入試に直結する時代を迎えた。この対策に向けて、当時としてはまだ珍しかったエッセイ指導やオンライン英会話の導入を試み、その結果、多くの生徒たちが英検2級に合格することができた。自分のできる範囲の指導としては、十分に成果をあげられたと思う。

しかし同時に、当時の英語授業だけでは、限界を感じざるを得なかった部分があった。私の心の中で常にあったのは、本当にこのアプローチで良いのかという疑問である。私自身が理想とする「本当の英語力」とは、下のCEFR B2が示すような英語の実践力(パフォーマンス)だけでなく、思考力を備えた力と考えている。

B2(英検準1、TOEFL Junior®860相当)

自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的な話題でも具体的な話題でも、複雑な文章の主要な内容を理解できる。母語話者とはお互いに緊張しないで普通にやり取りができるくらい流暢かつ自然である。幅広い話題について、明確で詳細な文章を作ることができる。

訳読や速読中心の授業では、英語を理解するという力は育成できるが、例えば自分自身の意見を考えて答えなさい、というような思考力が求められるような部分までは対応できない。今でも覚えているのが、あるとても優秀な生徒（定期考査平均90点台で学年の上位10％）が、私に言った一言だ。

『先生、ライティングのエッセイ問題、英語は大丈夫ですが、何を書いていいかがでてこないんです。』

英語の語彙力も文法理解も読解もできる生徒が、思考を求められた瞬間、とまる。そんな状況を多々みてきた。私自身もそういう力は「英語科」ではなく、「国語科」が中心に育成する力であると、勝手に決めつけていた部分があったと思う。

そして頭の角に眠っていた20年前の大学院時代の先輩の言葉が、どんどん大きくなって響いてきた。

『英語の検定試験は、対策すれば点数は上がるけれど、本当の英語力があれば別に対策しなくても取れるんだよね。TOEIC®やTOEFL® ってそういうテストだよ。』

確かに本当の意味で、英語ができる人々は、どんな検定試験においても高得点を取ることができる。ある優秀な大学院の友人は、過去問を1回解くだけで、初めてのTOEIC®で920というスコア。そして、そういう方たちに共通するのは、英語の実践力（パフォーマンス力）があるだけでなく、抜群の思考力も兼ね備えているということ。そう、私が追い求めたいのは、そういう力の育成。そこで今回のレポートでは、思考力が英語といかに関連しているかに焦点を当てて思考力の重要性を伝え、明日からでも使える思考力をも鍛えられる授業計画の立て方を紹介する。

2. 検証データの提示 ～データから明らかになる生徒の成長～

【英語あるある】

①国語力がある生徒は、英語力がよく伸びる。

②宿題や課題の提出期限を守るなど、学ぶ姿勢がある生徒は、よく伸びる。

③英語は一生懸命学ぶが、なかなか検定で結果を出せない生徒がいる。

④TOEFL Primary® STEP2で高得点を取得した生徒が、TOEFL Junior®になると一気にスコアダウンする生徒がいる。

上の①～④は直観的に感じることがあり、なんとなく理由も分かるが、ハッキリとは分からない。このような状況は、本校に限らずどの学校でも起こり得ることだと思う。

そこで、TOEFL Primary® STEP2やTOEFL Junior®のスコアアップ率を、校内で実施している「知識・技能・(理解)」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点を色濃く出すもので数値化すると、そのような疑問に対して納得いく結果が得られ、どういう生徒がよく伸び、どういう部分が伸び率に関わっているのかが客観的に良く分かる。

勤務校の英語の定期考査は、シンプルな単語テストや文法問題の4択、作成して何度か添削されたエッセイの暗記なので、「知識・技能・(理解)」中心の軸としてとり、反対に国語では初見の実力問題が出題されるなど、より「思考・判断・表現」が求められる試験となっているので、思考力をみる指標としてとる。そして、毎日できるオンライン英会話のどれだけの回数（分数）を行ったかを「主体的に学習に取り組む態度」としてみる。

【参考】同様の軸として採用できるもの

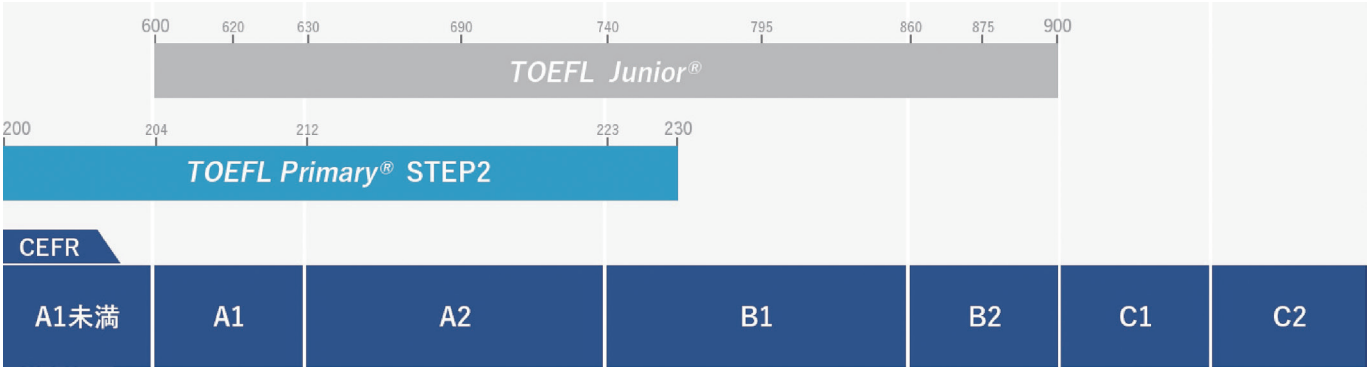
「知識・技能・(理解)」　他：英単語の小テスト、暗記中心のもの

「思考・判断・表現」　他：国語の実力考査、英語に限らず初見で思考力がためされる試験

「主体的に学習に取り組む態度」　他：課題の提出率

生徒	学年	中① 1学期	現在 (学年末)	英語	国語	総分数 年平均
①	中3	213	780	97.3	78.0	5000分(25分×200日)
②	中2	213	720	70.1	60.6	3575分
③	中2	218	705	54.0	22.7	2450分（25分×100日）
④	中2	227	815	82.5	75.6	3500分
⑤	中1	213	222	98.3	83.4	9000分（25分×360日）
⑥	中1	210	216	89.0	33.6	7175分
⑦	中1	218	223	93.9	76.3	5025分

*200台のスコアはTOEFL Primary® STEP2, 700～800台はTOEFL Junior®のスコア



TOEFL Primary® STEP2, TOEFL Junior®, CEFR

【データから分かること】

●3観点が揃う生徒の伸び率は高い。（例：生徒①、生徒⑤、生徒⑦）

●国語（思考・判断・表現）が高い生徒は、伸びやすい。（例：生徒①、生徒④、生徒⑤、生徒⑦）

●入学時が高くても、国語（思考・判断・表現）を中心に総合的な学力が弱い場合、伸び悩む。（例：生徒③）。TOEFL Primary® STEP2は小学生向け、TOEFL Junior®は中高生向けのテストであり、TOEFL Junior®ではアカデミックな問題が増えるため、国語やその他の学力の部分が大きく影響を及ぼすと考えられる。

●英語（知識・技能・（理解））と年平均(学ぶ姿勢)が高くとも、国語（思考・判断・表現）が伸び悩むと、TOEFL Primary®では点数はとれるが、TOEFL Junior®では難しくなることがある。（例：生徒③、生徒⑥）

もちろん、学校によって状況は異なるが、英語に関わらず、3つの観点を数値化してみると、同様の結果が得られると思う。

40～50人の少ないデータではあるが、この3～4年の全体データからみると、やはり国語（思考・判断・表現）がベースにあり、その力が備わっている生徒は伸びやすい傾向が読み取れる。

従って、データからも今後の指導の重要なポイントは、英語のパフォーマンス力を伸ばしながら、思考力（思考・判断・表現）の力を伸ばしていくことではないだろうか。

3. 設問の指示文と考える力 ～TOEFL®と国語の指示文は同じ～

TOEFL Junior®の指示文から見ても、ETSが測ろうとしている力が、英語を使えるかどうかだけではなく、思考力までをも測ろうとしているのが良く分かる。下はTOEFL Junior®のリスニングとリーディングの設問の分類と例であるが、〇の質問は、リスニングの内容を聞いて、そのまま答えるのではなく、全体の話を踏まえて、考えてから回答を選ぶ必要がある設問ではないだろうか。つまり、英語を話せて聞く能力があっても、思考力が身についていなければ、正答を導くことは難しくなる。

【リスニング】

1. 〇要点を聞き取る　⇒ 教師/クラスは主に何について話していますか?
2. 〇目的を聞き取る　⇒ 教師はなぜXについて話していますか?
3. 　理由を聞き取る　⇒ 教師はなぜXについて話すのですか?

4. ○暗に示された詳細を聞き取る ⇒ Xについて推測できることは何ですか?
5. ○将来の推測を聞き取る ⇒ クラス/教師/生徒たちはおそらく次に何をするでしょうか?
6. 詳細を聞き取る ⇒ 教師は生徒に何を指示していますか?

【リーディング】

7. ○要旨を問う ⇒ この記事は何についてですか?、見出しはどれですか?
8. 具体的な内容や理由を問う ⇒ スケジュールによれば、Xはいつ行われますか?
⇒ XはなぜYを行いましたか?
9. ○予測やまとめを問う ⇒ 著者の言及によれば、XからYについて何が推測できますか?
⇒ なぜ著者はXについて言及しているのでしょうか?
10. 語彙理解を問う ⇒ 文中の '○○' の意味は何ですか?一番近い意味はどれですか?
11. ○本文の論理を問う ⇒ 次の文が入る適切な場所はどこですか?

さらに言うと、中学入試対策の国語の設問を比較材料としてみると、設問の聞き方は異なるが、同じ力が測られていることがよく分かる。「12」は「4」や「9」の推測に近く、「13」は「3」の理由を聞く問題。「14」と「15」は、「4」「6」「9」に近い問題だと分かる。

【中学入試のある国語問題集の設問】

12. 下線部①について、この時のメアリーの気持ちとしてもっとも適当なものを選びなさい。
13. 下線部②のようにメアリーが興奮している理由としてもっとも適当なものを選びなさい。
14. 下線部③の「責任」とはこの場合、どういう意味ですか。
15. 下線部④は、どういうことですか。次の中から選びなさい。

つまり、誰もが疑わない理解力や思考力を測る国語の設問と、TOEFL®の設問は類似しているので、やはり、CEFR基準を測るTOEFL®でも思考力が求められていることが良く分かる。

ここで、今一度、CEFR B1とB2の英語力に関する部分を再度みると、確かにその内容は、英語に限らず、**それは日本語でも重要な教養として身につけるべき内容**である。

【CEFR B1(英検2級レベル、TOEFL Junior®740相当)】

●仕事や学校、娯楽などで日常的に出会う身近な話題について、主要な点を理解できる。
●起こりそうな、ほとんどの事態に対処することができる。
●身近な話題や自分の興味のある話題について、筋の通った簡単な文章を作ることができる。

【CEFR B2(英検準1級、TOEFL Junior®860相当)】

●抽象的な話題や具体的な話題を問わず、複雑な文章の主要な内容を理解できる。
●幅広い話題について、明確で詳細な文章を作ることができる。

そして、当たり前ではあるが母語の日本語でできないものが、英語になるとできることはない。そうなると、やはり本当の意味で、英語力を身に着けるには、英語の授業で英語を使う力、とベースにある思考力(考える力)を同時に伸ばしていく必要がある。

4. 授業計画の立て方 ～明日から実践できる効果的な授業計画プラン表～

最初は正直、訳読中心のアプロ―チから自分自身の授業スタイルを変えることには、かなり戸惑いがあり、悩んだ。本当に英語だけでなく、思考力をも伸ばしていくような授業が可能なのか、という疑問があった。またGIGAスクール構想で1人1台のPCになり、教育が大きく変わっている中、私たち教育者も変わらざるを得ないプレッシャーもあり、とても不安で悩み続けた。そして、色んな研修を受けて、文献をよみ、実際に生徒にも試した結果、現在、担当する教員研修や登壇を行う際には、このような表を用いて、授業設計を考えることを提案している。

■授業計画プラン表

	個人	協働	☑項目
メッセージ性（教室外）			ICTの有効性/取り組みやすさ
メッセージ性（教室内）			自律的学習　計画・姿勢
創造的思考			自己成長　肯定・効力・向上
思考力・判断力			実社会・自分事
知識・理解			タイミング　教科横断・学外連携

ICTの有効性

この表は、自身の経験とマイクロソフトの21CLD（21st Century Learning Design）の考え方をベースに作成している。21CLDとは、Microsoftが提案する今や未来社会で求められているスキルを身につけるための学習活動を考える手法(デザイン)のことである。そこで学んだことを自分自身の教授経験と組み合わせ、授業設計で必要なことをシンプルに表現している。

【左のカテゴリー】

●知識・理解：「知る・理解する」など
　活動例：単語の小テスト、英文の構造把握や内容理解の活動

●思考力・判断力：「考える・まとめる」など
　活動例：リーディングの要約、内容についてのディスカッションなど

●創造的思考：「問い作成からの意見」など
　活動例：リーディングに関わるもので新しく疑問を作り、それについて調べて意見を書くなど。

●メッセージ性：他者の意識をかえるたり、新しい情報を与えるなど
　活動例：創造的思考で表現したものを教室内で発表やＳＮＳで公開するなど

今の教育を考えると、創造的思考の上にそれがメッセージ性があるものかどうかも重要だと感じている。授業内のアウトプットで、何かを表現するのなら、それを自分の中で完結するのではなく、クラスメイトだけでも共有した方が良い。また社会を変えるようなアイデアなら尚更、外へ発信すべきである。そして、そのようにすることで、「見られる」意識が備わり、学びの姿勢も変わる。

【上部のカテゴリー】

個人の活動か、協働の活動か。

【矢印】ICTの有用性

傾向だけではあるが、矢印の上にある活動ほどICTの恩恵を受けやすい。例えば、知識・理解を測る、英単語の小テストを行うという活動は、成績評価を行うためではなく、単語を定着できるかどうかが、目標であり、その活動は、それが紙であろうがアプリであろうが、どちらでなければならないわけではない。従って、ICTでなければならないわけではない。しかし、学外へメッセージ性のあるものの発信する場合には、もちろん、紙に印刷を行って送付するという形でもできるが、時間がかかり、印刷代もいる。それはICTを用いてSNSや公式HPにデータを上げるという手法を取れば、早く便利である。従って、ICTの有用性が高い。

GIGAスクール構想以来、学習アプリや学習補助アプリが乱立している。確かにICTを使うのは便利であるが、無理やり使う必要はない。その活用で、教員の負担が減り、業務が効率化され、なお生徒へのメリットが多い場合は使うべきであり、何事も状況をみて、活用するのが良いと思う。

【☑項目】

☑項目は、一連の活動を考える上で、必ず設定したり、振り返ったり、修正したりする部分を示す。

①タイミング/教科横断/学外連携
今の生徒の状況や立場を踏まえて考えたり、他教科のシラバスをみて連携部分を探したり、学外の外とつながる活動があるかどうか。

②実社会・自分事
教材に関わることを実社会の出来事とつなげて考えたり、自分事として捉え直したりする活動があるかどうか。

③自己成長：肯定・効力・向上
生徒自身が伸びたと実感する活動になっているか。これならできるやこれで〇〇ができた、次はできると思うように設計されているか。

④自律的学習
計画を練ったり、目的をもって学んだりという姿勢を育成する機会や活動があるか。

⑤ICTの有用性
ICTは便利であるが、その使い方は適切か。それによって生徒が取り組みやすくなったり、教員の負担が減ったりしているか。

【使い方】

定期考査までの授業（約15～20回分）を黄色の部分で考えることを基本とし、その間で黄色の6つのマスが埋まるよう設計する。

例えば、一般的な単語の小テストを行うなら、それは個人で行う知識・理解の活動となり、右の用に☑がつく。グループで、あるテーマについて調べて小論文を書いて提出するなら、それは思考力・判断力が必要であり、創造的思考の活

動で、協働の活動となるので、そちらに☑がつく。あまり深くは考えず、これに関わりそうな活動だと思えば、そこに☑をどんどんとつけていく。

そんな風にしてまずは、自分の授業で行う活動を分析する。そしてそこから縦軸の☑項目でも考えて、授業内の活動が多様になるように調整していく。例えば、教科横断ができるなら教科横断に☑、また実社会のニュースや自分の進路に関わるような活動を取り入れるなら、そこに☑という具合で考えていく。**☑項目は、チェックという名前であるが、ポイントはその☑項目の視点でも授業計画を考えると、もっと多様な授業設計ができる、ということである。**そして、15～20回程度の時間数で、シート内の項目に多くの☑が入れば、それは多様な活動が行われ、英語だけでなく、思考力をも育成し、総合的な学力を伸ばす授業として考えることができる。

	個人	協働	☑項目
メッセージ性（教室外）			ICTの有効性/取り組みやすさ
メッセージ性（教室内）			自律的学習　計画・姿勢
創造的思考		☑	自己成長　肯定・効力・向上
思考力・判断力		☑	実社会・自分事
知識・理解	☑		タイミング　教科横断・学外連携

ICTの有効性

5. 最後に

このレポートは2部制であり、前半となる今回は、最初に訳読中心の授業で限界を感じ、思考力が重要であると紹介しました。実際、それはデータからも分かり、また国語の指示文からも、英語が国語と密接に関係していると指摘しました。そして、その後、その問題を踏まえて、どう授業プランを計画していくかを紹介しました。次回のレポートでは、さらにそこからTOEFL Junior®のスコアレンジをベースにした知識・技能・(理解)の指導法を紹介し、さらにはそこからどう授業を広げていくかを具体的に紹介します。

大部分は自分自身の教授経験に基づいており、私は本格的に教育大学院などで教育学を学んだわけではありません。普段から考え、色んな研修に参加させていただいて学んだ知識を授業に活かしていきながら、最終的にたどり着いたものです。そのため、言葉の定義や曖昧な部分が多々あると思います。ただ、それでも、提案の授業計画プランに従って考えると、生徒の思考力や人間力を伸ばす新しい活動案が生まれてくると思います。

私たち教員は、やはり教員として、生徒たちが授業中に活発に興味深く取り組んでいる姿を見ると、とても幸せになります。個人的には、生徒たちが楽しそうに授業を受けて、なんだか楽しかったと思ってくれたら、その授業は成功だと思っています。もちろん、時には失敗することもありますが、現代は探究、探究と言われる時代です。私たち教員も授業を探究し、失敗する姿を見せて次につなげていけば良いのではないでしょうか。新しいチャレンジをしていく先生は、その点でも手本となり、素晴らしいと思います。一緒に生徒の思考力や人間力を伸ばす授業を考えていきましょう！お読みいただいて、少しでも新しい活動案が出てくれれば大変嬉しく思います。